

大通公園を望む窓辺から

さあ、これからの
50年について話そう常任理事 あおき ひでとし
青木 秀俊

これは昨年10月に開催された、第50回日本救急医学会総会（会長 杏林大学 山口芳裕教授）のメインテーマである。詳細の一部は、昨年12月号の道医報に浅井康文先生が報告済み。私が興味深く聞いたテーマは、「高齢化・医療経済」であった。2011年の国土審議会の「我が国における総人口の長期的推移」によると、明治維新（1868年）3,330万人、第二次世界大戦終戦時（1945年）7,200万人、その後激増し2004年のピーク時12,800万人、その後減少するが団塊の世代が全て75歳以上となる2025年以降は激減し、およそ2030年11,500万人（10年間1,000万人減少）、2050年9,500万人、50年後には6,500～7,000万人に半減すると予測されている。

人口減少を経済学的にみると種々の議論があるが、一般的に人口推移とくに生産年齢人口の減少と高齢化率の増加はGDPの低下を招くと言われており、演者の一人の経済学者は日本の小国化とまた経済大国からの後退を危惧した。

医療経済の視点からみると、高齢化により在宅医療や介護費増の他に医療技術の進歩により、所謂time to deathの延長による医療費増も予測された。また現在の医師不足から一転このままでは10年、20年後の医師のたぶつきも指摘された。

どのテーマも結論を求めず、最後に座長がまとめらしきものを述べた。このセッションでは、「全てに悲観的になる必要はなく、江戸時代の人口は3,000万人で、日本の資源だけで自給できた。問題は、人口増加を前提に作られたシステムやインフラが、人口減少時代には適合しないことをまず認識、理解すべきである。ではどうすれば良いのか、それを早急に考えるべき」と述べた。この原稿を執筆中に我が国の総理大臣が、「従来とは次元の異なる少子化対策」を表明するという。多いに期待しましょう。

スポーツの力

理事 しばた かおり
柴田 香織

昨年のスポーツ界で日本中に新時代を垣間見せたのは、何といてもサッカーW杯の日本代表チームでした。私が学生時代にあこがれたバッケンバウアーやスアレスがいた優勝常連国のドイツ、スペインにあの大舞台で日本が堂々と勝利するとは誰が想像したでしょう。

今年は9月にラグビーW杯フランス大会があります。2019年の日本大会では日本が史上初のベスト8に入り、ラグビーの魅力を広く国民に知らしめました。私は開会式とロシア戦を東京スタジアムで観戦しました。印象深いのはロシアの国歌斉唱時に日本人観客がロシア語で歌い出し、周囲のロシア人も驚いていたことと、試合中に好プレーが出ると敵味方なく称える拍手歓声が湧き上がり、その輪が競技場全体にうねりの様に広がったことでした。日本の勝利で試合は終わりましたが、ロシア人も日本人も互いに握手、ハイタッチでまさにノーサイド、映像で見るとような光景で興奮し感動するとともに、純粋なスポーツの力を実感しました。今年も命がけのフェアプレーが世界を魅了することでしょう。

最近日本人の「おもてなし」や試合後のごみ拾い、ロッカールームの清掃等で海外メディアが日本人独特の文化を絶賛しましたが、日本人の気質やDNAは気候変動や人権問題、核軍縮など世界の閉塞感のある難問を乗り越えるエッセンスになり得る気がします。人類を豊かにする政治経済活動は大切ですが、行き過ぎた国益、経済最優先策で将来世代に代償を負わせてはなりません。

WBCで世界が認める大谷、ダルビッシュ両選手が協力を惜しまない栗山監督や、サッカーの森保監督のように、信念ある言動で人心を動かし、優秀な選手でありサポーターでもある国民に信頼、尊敬され、新しい時代を見せてくれる日本の政治経済界のリーダーがそろそろ登場することを期待しています。

